

## TOEIC の結果から考察するコロナ禍の学生の英語学修状況

小西 康文<sup>\*1</sup>・上田 敦子<sup>\*2</sup>・大津 理香<sup>\*3</sup>・大森 真<sup>\*3</sup>・大山 簾<sup>\*3</sup>・  
菊池 武<sup>\*3</sup>・小林 邦彦<sup>\*3</sup>・佐々木 友美<sup>\*3</sup>・館 深雪<sup>\*3</sup>

(2022年10月17日受理)

## Students' English Language Learning in the COVID-19 Pandemic

Yasufumi KONISHI<sup>\*1</sup>, Atsuko UEDA<sup>\*2</sup>, Rika OTSU<sup>\*3</sup>, Makoto OMORI<sup>\*3</sup>, Ren OYAMA<sup>\*3</sup>,  
Takeshi KIKUCHI<sup>\*3</sup>, Kunihiro KOBAYASHI<sup>\*3</sup>, Tomomi SASAKI<sup>\*3</sup>, and Miyuki TATE<sup>\*3</sup>

(Received October 17, 2022)

### Abstract

This study is an attempt to understand the English language learning status of university students in the COVID-19 pandemic duration. Students who enrolled in 2020 becomes in their third year in 2022. At Ibaraki university, students take the TOEIC online test in December of their first year and June of their third year. Analysis of the scores at these two time points and the results of the questionnaire showed that for the group of students with higher proficiency levels, the drop in scores was more pronounced in June of their junior year than in December of their freshman year. In addition, it was found that the group of students with higher proficiency had a shorter "time exposed to English" in their sophomore and junior year.

キーワード: TOEIC、COVID-19、英語使用割合、TOEIC スコアの変化

### 1. はじめに

2020年以降、コロナ禍により私たちの生活および学習形態は大きく変化することとなった。本学の基盤教育科目は基本的にオンライン授業となり、それに伴い教員の授業方法や評価方法、あるいは学生の学習方法など多々変更が生じている。教員および学生間でのコミュニケーションが学習の

---

\* 茨城大学全学教育機構 (Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University)

<sup>1</sup> データ分析、執筆を担当

<sup>2</sup> 執筆を担当

<sup>3</sup> データの収集、提供等を担当

基礎となるプラクティカル・イングリッシュ（以下、PE）においても、当初はオンライン授業を強いられることになったが、近年は情報機器のコミュニケーションツール等を利用しつつ対面授業へと戻っている。

こうした状況の中、本学で行われている TOEIC 一斉テストもオンライン受験となり、現在もオンライン受験が続いている。数年前から、この TOEIC 一斉テストは1年次の後期と3年次の前期に行われている。したがって2020年度の新入生は、1年次と3年次に行われた TOEIC 一斉テストはどちらもオンライン受験となる。これまでもいくつかの観点から本学の英語教育プログラムについて調査してきたが（小林他 2016、菊池他 2020）、オンライン受験が開始された2020年度の1年次および3年次の TOEIC スコアは、2015年から2022年度に至るまでの間で全受験者の平均スコアが最も高くなっており、オンライン受験前後の平均スコアの変動幅は例年に比べ非常に大きくなっている。その原因として、学習環境の変化や受験方法の変化など様々な要因が考えられるが、調査するための十分なデータは得られていない。そこで、今回はオンライン受験後の期間の範囲内で、TOEIC 一斉テストに付随するアンケート項目の一つにある「英語使用割合」に焦点をあて、1年次から3年次にかけての TOEIC スコアの変化と「英語使用割合」の変化から、コロナ禍における本学の英語教育プログラムの状況を確認する。

基盤教育科目の PE では、入学時の習熟度に応じて、容易なレベルの Integrated English（以下、IE）IA から、その上の IE IIA、さらにその上の IE IIIA へとレベル分けされたクラスに分けて授業がおこなわれ、1年次の TOEIC 一斉テストを受験する時期には、IE IA から IE IB へ、IE IIA から IE IIB へ、IE IIIA から IE IIIB へ移る。その後、順調に進めば、3年次の TOEIC 一斉テストを受験する時期には、学生は PE の Advanced English（以下、AE）IIA、AE IIIA、AE IIIC のいずれかのレベルのクラスに属しているか、PE を修了している状態にある。これらのレベルの中では AE IIA が最も易しく、その上に AE IIIA、そして AE IIIC が PE 科目の中で最も高いレベルに設定されている。そして、AE IIIC をすでに履修した学生は PE 修了となり、その一部は Global English Program（以下、GEP）へと進む。そのほかにも、諸所の理由により、3年次の後期に他のレベルのクラスに属していることも、PE を修了していないにも関わらず PE 科目を履修していないものもいるが、全体に比べ人数が少ないため今回は調査対象としない。

大学入学から1年次の TOEIC 一斉テストまでの半年と数ヶ月の間に、学生は各レベルやクラスに応じた大学での英語学習の習慣あるいは基準が作られる。この1年次に作られる英語学習習慣を基準にとり、3年次の「英語使用割合」の変化と共に本学におけるレベルごとの TOEIC スコアの変化を見ることで、コロナ禍における学習状況を考察する。

今回の分析の対象者は、2020年度に1年生として受験し、2022年にも受験した学生の内、3年次に「AEIIA」、「AEIIIA」、「AEIIIC」、「GEP」、「その他」のいずれかに該当する1363名の学生とする。ここで、「その他」は GEP を履修申請した学生以外の PE を修了した学生を指す。1年次および3年次における TOEIC スコアの平均値は508.8および466.0であり、IIBC 2022 で公表されている IP テスト学校データの大学生に対する平均スコアである485と近い値となっている。1年次および3年次のレベルごとの TOEIC スコアに関する統計量は表1のようになる。

表 1 今回の分析対象者のレベルおよび受験年度、人数、平均値、中央値、分散、特色

レベル	受験年度 (年度)	人数 (人)	スコアの 平均値	スコアの 中央値	スコアの 標準偏差	特色
IE IB	2020	129	402.9	405.0	98.5	IE の中で初級レベル
IE IIB	2020	1026	510.2	510.0	112.5	IE の中で中級レベル
IE IIIB	2020	208	567.5	557.5	130.2	IE の中で上級レベル
AE IIB	2022	110	350.2	365.0	108.3	1 年次後学期のスコア 350 未満
AE IIIB	2022	317	399.6	405.0	95.6	1 年次後学期のスコア 350 以上、450 未満
AE IIIC	2022	453	445.6	455.0	118.3	1 年次後学期のスコア 450 以上、550 未満
GEP	2022	64	600.5	572.5	125.2	1 年次後学期スコア 550 以上
その他	2022	419	548.1	545.0	132.4	GEP を履修申請者以外 の PE 修了者

## 2. 分析方法と結果

TOEIC 一斉テストでは、アンケートも同時に行われる。その項目の中の一つは「英語使用割合」に関する項目となっており、その内容は「日常生活の上で英語を使用する割合はどのくらいですか？」である。この項目の回答に対する選択肢は、「なし」、「1%～10%」、「11%～20%」、「21%～50%」、「51%～100%」の五つである。図1のように1年次の回答結果は「なし」が42パーセント、「1%～10%」が50パーセント、「11%～100%」が8パーセント、3年次の回答結果は「なし」が46%、「1%～10%」が46パーセント、「11%～100%」が8パーセントとなった。ここで、「11%～20%」、「21%～50%」、「51%～100%」の三つは回答数が少ないため、一つにまとめて「11%～100%」とした。

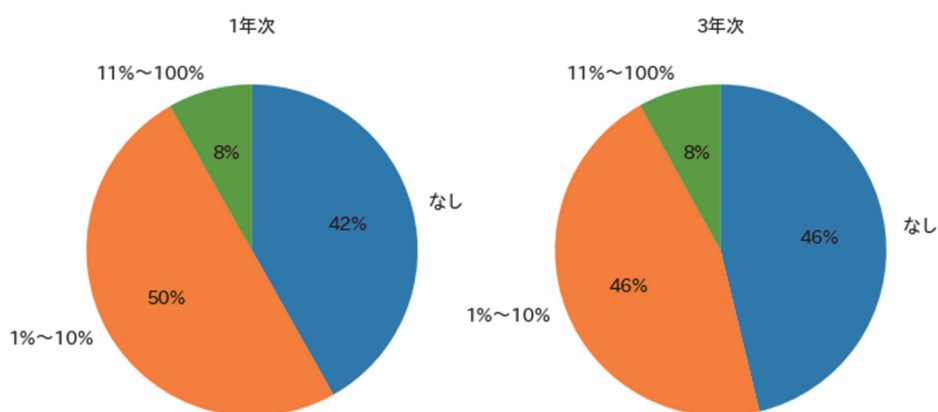


図 1 英語使用割合に対する 1 年次の回答結果と 3 年次の回答結果 :

1 年次のレベル別で表わすと図 2 のように IE IB の回答結果は「なし」が 43 パーセント、「1%~10%」が 50 パーセント、「11%~100%」が 7 パーセント、IE IIB の回答結果は「なし」が 44 パーセント、「1%~10%」が 48 パーセント、「11%~100%」が 8 パーセント、IE IIIB の回答結果は「なし」が 31 パーセント、「1%~10%」が 60 パーセント、「11%~100%」が 9 パーセントとなった。

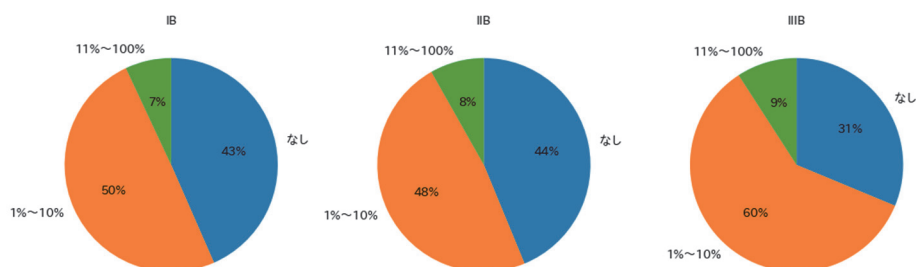


図 2 英語使用割合に対する IE IB、IE IIB、IE IIIB の回答結果

同様に、3 年次のレベル別で表わすと図 3 のように AE IIA・IIIA の回答結果は「なし」が 45 パーセント、「1%~10%」が 50 パーセント、「11%~100%」が 6 パーセント、AE IIIC の回答結果は「なし」が 44 パーセント、「1%~10%」が 48 パーセント、「11%~100%」が 8 パーセント、GEP・その回答結果は「なし」が 49 パーセント、「1%~10%」が 40 パーセント、「11%~100%」が 10 パーセントとなった。

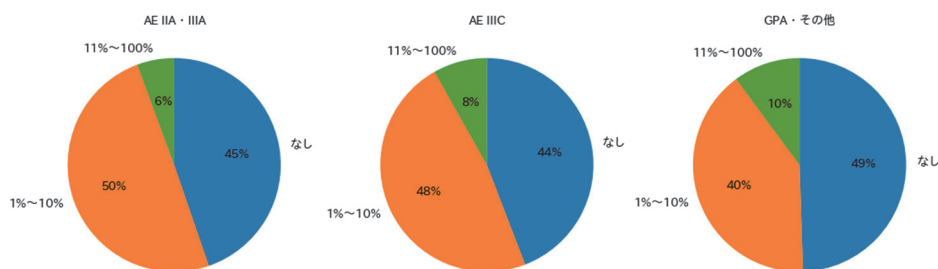


図 3 英語使用割合に対する AE IIA・IIIA、AE IIIC、GEP・その他の回答結果

図 1 の結果より、3 年次は 1 年次よりも「なし」が 4 ポイント増加し、「1%~11%」が 4 ポイント減少していることから、1 年次から 3 年次にかけて「英語使用割合」は若干減少したことがわかる。また図 2 より、1 年次においては「なし」に対する回答割合が最も少ないのは、最も高いレベルに設定されている IE IIIB であるのに対して、図 3 より 3 年次においては「なし」に対する回答割合が最も多いのが GPA・その他となることから、高いレベルに設定されているグループの英語使用割合が大きいとは一概には言えない。しかしながら、アンケート項目の内容にある「日常生活の上で英語を使用する割合」に対する解釈の仕方は、それぞれの回答者に強く依存すると考えられるため、1 年次から 3 年次の変化を中心に分析する。すると、このアンケート結果にたいして「英語使用割合」が増加した学生は全体の内 236 名、変化がなかった学生は全体の内 830 名、減少した学生は全体の内 297 名となり、変化がなかった学生は 61%であり、残りの 39%の学生が変化したことになる。

また、「英語使用割合」が増加した学生と減少した学生、変化がなかった学生に対する 1 年次から 3 年次の TOEIC スコアの上昇幅の平均は、それぞれ-31.5、-58.6、-40.3 となり、「英語使用割合」に変化がなかった学生を基準に考えると、「英語使用割合」が減少した回答者の TOEIC スコアの下落が目立つ結果となった。実際に t 検定においてこの二つの平均の差を評価すると p 値は 0.02 となり有意水準 0.05 を下回る。

次に、この三つのグループに対する、本学で採用されるレベル構成を調査する。図 4 で示されているように、基準となる 1 年次から 3 年次にかけて「英語使用割合」が変化しなかったグループでは、1 年次には IE IIB に属する割合が 11%、IE IIIB に属する割合が 76%、IE IIIB に属する割合が 14% となっており、3 年次には AE IIA および AE IIIA に属する割合が 32%、AE IIIC に属する割合が 33%、GEP およびその他の PE を修了したグループの割合は 35%となっている。1 年次から 3 年次にかけて「英語使用割合」が増加したグループでは、1 年次には IE IIB に属する割合が 8%、IE IIIB に属する割合が 78%、IE IIIB に属する割合が 14%となっており、3 年次には AE IIA および AE IIIA に属する割合が 36%、AE IIIC に属する割合が 39%、GEP およびその他の PE を修了したグループの割合は 25%となっている。他方で、1 年次から 3 年次にかけて「英語使用割合」が減少したグループでは、1 年次には IE IIB に属する割合が 7%、IE IIIB に属する割合が 73%、IE IIIB に属する割合が 20%となっており、3 年次には AE IIA および AE IIIA に属する割合が 27%、AE IIIC に属する割合が 30%、GEP およびその他の PE を修了したグループの割合は 44%となっている。特徴的なことは、GEP お

よびその他の PE を修了したグループの割合が、「英語使用割合」に変化がなかったグループに対して「英語使用割合」が増加したグループでは 10%減少し、「英語使用割合」に変化がなかったグループに対して「英語使用割合」が減少したグループでは 9%増加している点である。

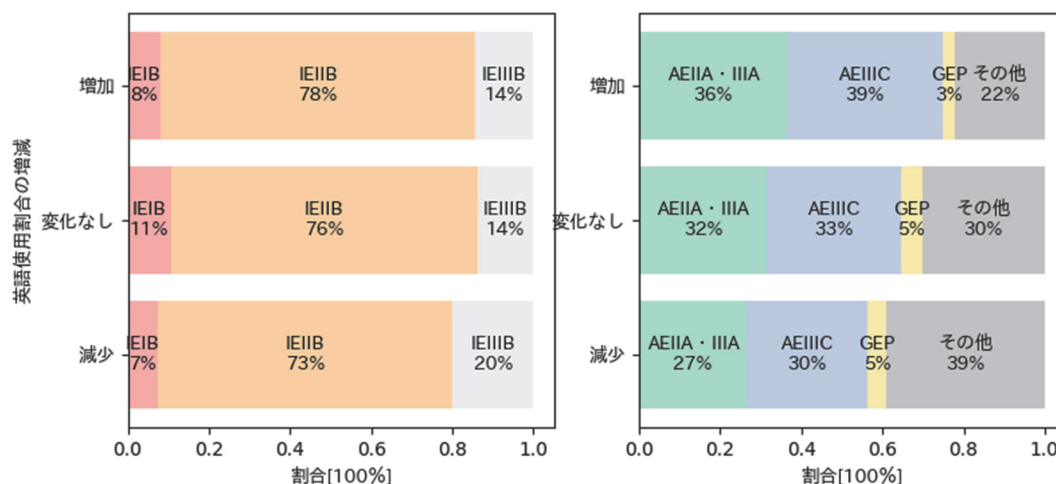


図 4 英語使用割合の増減ごとの各レベルの人数割合：

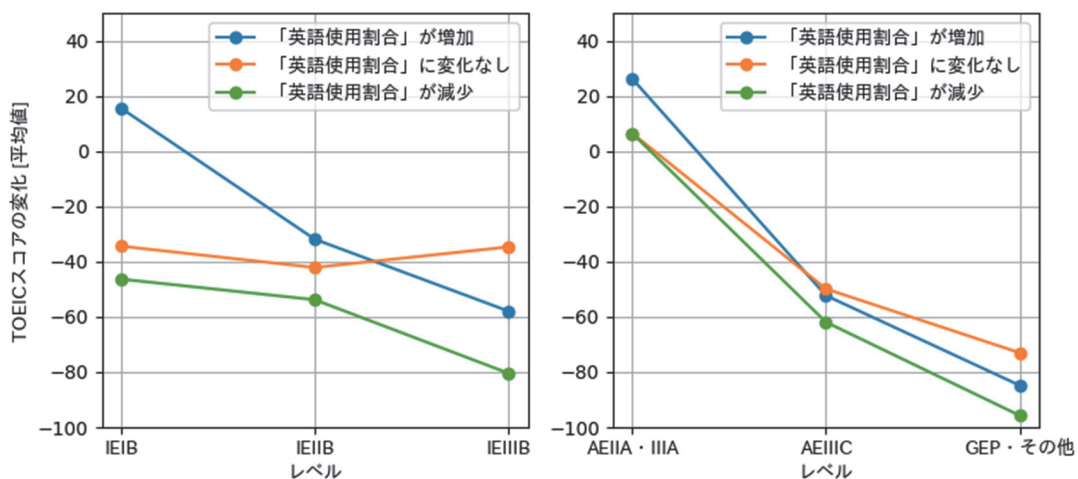


図 5 各レベルにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値

次に、各レベルにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値を調査するにあたり、「英語使用割合」が増加したグループと「英語使用割合」が減少したグループを比較する。図 5 では、「英語使用割合」が増加したグループを青線、「英語使用割合」が減少したグループを緑線、「英語使用割合」に変化がなかったグループを赤線で表わし、各レベルに対する TOEIC スコアの変化を平均値で表わした。特に、左図は 1 年次におけるレベルとして IE IB、IE IIB、IE III B を横軸にとり、右図は 3 年次におけるレベルとして AE II A・AE III A、AE II IC、GEP・その他の 3 つの区分を横軸にとって

表わした。全てのレベルにおいて、「英語使用割合」が増加したグループの TOEIC スコアの変化に対する平均値が、「英語使用割合」が減少したグループの TOEIC スコアの変化に対する平均値を超えることがわかる。また、1 年次においては IEIB、IEIIB、IEIIB の内、最も平易なレベルにある IEIB におけるスコアの変化に対する平均値が最も高く、最も高度なレベルにある IEIIB におけるスコアの変化に対する平均値が最も低い値となった。同様に、3 年次においても AEIIA・IIIA、AEIIC、PE 修了の内、最も平易なレベルにある AEIIA・IIIA におけるスコアの変化に対する平均値が最も高く、最も高度なレベルにある GEP およびその他の PE を修了したグループにおけるスコアの変化に対する平均値が最も低い値となった。

しかしながら、「英語使用割合」に変化がなかったグループを基準に考えると、状況が異なってくる。1 年次に IEIIB に所属していたグループ、3 年次に AEIIC あるいは GEP およびその他の PE を修了したグループに対しては、「英語使用割合」が増加したグループよりも「英語使用割合」に変化がなかったグループの方が TOEIC スコアの変化に対する平均値の下落幅は小さくなっている。これらレベルのグループはお互いに強く関連していて、1 年次に IEIIB に属していた学生の多くは、3 年次に AEIIC あるいは GEP およびその他の PE を修了したグループに属している。この 1 年次に IEIIB に属していたグループには二つの特徴があらわれている。一つが、このグループの「英語使用割合」に変化がなかったグループにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値と「英語使用割合」が減少したグループにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値の乖離が大きいことである。もう一つが、このグループの「英語使用割合」に変化がなかったグループにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値よりも「英語使用割合」が増加したグループにおける TOEIC スコアの変化に対する平均値の方が小さな下落幅になっていることである。

### 3. 考察

これまでの分析により、「英語使用割合」に変化がなかったグループに対して「英語使用割合」が減少したグループの TOEIC スコアの下落幅が目立つ結果となった。その大きな要因として、1 年次に IEIIB に属していたグループが挙げられる。このグループに属していた学生の多くは、3 年次に AEIIC あるいは GEP およびその他の PE を修了したグループへと移る。この AEIIC あるいは GEP およびその他の PE を修了したグループは「英語使用割合」が減少したグループの中で最も大きな割合を占めているため、TOEIC スコアの下落幅を大きくする原因となっている。

ここでは、受験者が大学生活の多くでコロナ禍という特殊な状況下にあったことをふまえて、最も高いレベルに属する IEIIB から AEIIC あるいは GEP および PE を修了したグループが、「英語使用割合」の減少に大きく寄与することとなった原因について考察する。このレベルの学生の多くは海外留学を学習の動機付けとしていることが多いが、コロナ禍により大学入学時から海外留学できる可能性は非常に低く、学習の動機付けを維持させることができなかつたことが考えられる。情報機器によるコミュニケーションツール等を利用し、海外留学に近い状況となるよう対応を図ったが、その効果は限定的であったと考えられる。今後は、限られた教育リソースのなかで、海外留学を含めた学習の動機付けの促進と、経済的な負担の少ない情報機器の利用により英語使用環境を充実させることで、効果的な英語教育プログラムを考えていく必要がある。

最後に、「英語使用割合」に変化がなかったグループに対して「英語使用割合」が増加したグループの TOEIC スコアの上昇幅が大きく現れなかったことについて少し言及する。こちらに関しても、1 年次に IEIIB に属していたグループが大きな要因の一つとして考えられる。このグループでは「英語使用割合」に変化がなかったグループよりも「英語使用割合」が増加したグループの方が TOEIC スコアの下落幅が大きくなっている。現状として、その納得のいく理由は見つからないがコロナ禍という特殊な教育状況で生じた例として、今後の調査の中で検討していきたい。

## 引用文献

- 小林邦彦・小西康文・福田浩子・佐々木友美・上田敦子・大森真・館深雪・野村幸代・藤井拓哉.(2016) 「TOEIC テストスコアとアンケート分析による茨城大学総合英語プログラム改善のための因子分析」茨城大学大学教育センター紀要, 第 6 号, 11-21.
- 菊池武・小西康文・小林邦彦・上田敦子・大森真・館深雪・大山簾・大津里香・鈴木聡子.(2020) 「2018 年度 TOEIC スコアと授業アンケートの関係」茨城大学全学教育機構論集 大学教育研究, 第 3 号, 127-137.
- 一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会.(2022) 「TOEIC Program DATA & ANALYSIS 2022 2021 年度 受験者数と平均スコア」, [https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official\\_data/pdf/DAA.pdf](https://www.iibc-global.org/library/default/toEIC/official_data/pdf/DAA.pdf), 2022 年 12 月 26 日参照.